

『十住心論』と『Itinerarium mentis in Deum』

比較思想的考察

笠井 貞

弘法大師空海の『秘密曼荼羅十住心論』と聖ボナヴェントウラの『神に至る靈魂の道程』(Itinerarium mentis in Deum)とは、前者が仏教、後者がキリスト教という異宗教の思想系統に属し、時代・場所・思想形態などを異にする。しかしながら、共に究極的真理に至る段階を提示した著作である。この小論では、両者の比較思想的考察を通して、その類似性と差異性を尋究し、両思想の根本的特質を明確にしたいと思う。

空海(774—835)は、『秘密曼荼羅十住心論』(十巻。略称『十住心論』)を選述し、次いでその内容の要髄を、『秘蔵宝鑰』(三巻。略称『宝鑰』)で叙述した。前者を広論、後者を略論という。この二書は、その構成や思想内容に相違も見られるが、共に「十住心」(Dasa-sthanasya-citta)の体系を論述したものである。空海が、『大日経住心品』を中心にして諸経論を考究して、凡夫より大覺に至る心

の状態の段階を説いたのである。人間の心の状態は無量である。住心とは心の止住する処の意味で、各個人の心は、その安定する位置を異にしているが、仮りに十種に分けて他の多くを摂すると言って、空海は、十住心を提示したのである。この小論では表題通り、広論を主にして考察する。『大毗盧遮那経』(『大日経』)で、菩提心為因、大悲為根、方便為究竟と説いて、菩提心と慈悲心と実践手段とが、一切智を得る三句であるとし、菩提とは、「如実知自心」であるとしている箇所を、空海は、『十住心論』の序に引用している⁽¹⁾。十住心論は、如実知自心の観行を深めて行く過程を十綱に分けて組織したものである。心の病氣は多いといっても、その原因は唯一で、無明がそれである。衆生は狂迷して帰るべき家を知らないから、三惡道に沈淪し、四生に踰躐する。苦の原因を知らないから、本来の世界に還る心を持ってない。聖父はそ

のような無知な者を懲んで、その帰り道を示したのであるという。これより以下において、十住心の内容を概観してみよう。⁽²⁾

第一の異生羶羊住心は、凡夫が善惡を弁えず、愚者が原因・結果の理法を信じない妄執であると言っているように、倫理的覺醒以前の狀態である。殺・盜・婬・妄語・麤惡・離間・無義・貪・瞋・癡の十惡を根本として、道德的判断に無知であり、諸惡の罪業は、無量無辺であるとして、人間惡の根源を追求している。ただ本能の満足を願望しているだけで、微少な善心の兆しさえない凡夫心の狀態である。この段階にある三十種外道を、『大日經疏』によって述べて、それらの外道は何れも真理に迷って輪廻するとしている。第二の愚童持齋住心は、凡夫に善心が兆し、自心の本源に帰る濫觴であると言う。絶対的な惡人はいないので、善心は次第に生長し、身口意の三業を慎む心から、仏法僧の三宝に帰依し、五戒・八戒・十善を実践する。五戒は、中国の儒教倫理の五常と同じであるという考え方を取り入れて、空海は、仁を不殺生に、義を不邪淫に、礼を不飲酒に、智を不偷盜に、信を不妄語に当てて、内容は同じであるとする。更に八戒を明らかにし、十善戒を修めることを説く。このように、第二の段階は、儒教倫理をも包含した、仏教の戒を基本とする倫理・道德の世界である。第三の婴童無畏住心は、倫理を超えて宗教心が覺醒した段階である。自在天・梵天などに帰依し、護戒生天により安心を得ようとする。数論 (Sankhya) ・声論 (Mīmāṃsā) ・勝論 (Vaiśeṣika) ・時論

(Kāśānātha) 等々、インドの十六の哲學説はそれであると説く。バラモン系統の諸哲學は有我論で、因果の理法を認めず、人間の禍福は、自在天・梵天などの意志によって決定されると主張するのである。

第四の唯蘊無我住心から仏教の解脱の道に入り、ここでは〈声聞〉の心のあり方を説く。実体的自我があると考えることを幻化や陽炎に譬えている。我執・法執・無明の惑の三つの迷いを越えることによって、唯蘊無我を理解するのである。外道の場合は、自我と自我に属する事物は実在するという執着によって生死界をさ迷い、三界の最頂部、有頂天たる非想非非想処天に生まれたとしてもまた墮落する。人間存在は、色・受・想・行・識の五蘊から成立していることを如実に知り、無我 (anātman) の理を体得する。三宝に帰依し、四諦を学び、戒・定・慧の三学を成就して解脱し、遂に阿羅漢の位に入る。この住心は、所謂小乗の聲聞乘である。六宗二十部とされる小乗は、この唯蘊無我の一句に摂せられる。結局、空海は、この声聞を法界の一門、法身の一徳であるとする。第五の拔業因種住心とは、〈緣覺〉の人が、十二因縁、即ち無明・行によって識・名色・六処・触・受があり、愛・取・有によって生・老死があることを観じて、四大・五蘊の生死を厭う。無常を覺り、三昧により、業と煩惱の根本、即ち無明業の種子を拔除する。緣覺は、菩提即ち悟りの智慧を得るための実践修行法たる三十七菩提分法は独力で悟り、五蘊・十二処・十八

界も自力で知る。利他の大悲が欠けているので、救いの方便を持たず、自分だけ寂滅を証得する。縁覚は、浅略釈では智慧狭劣ということになるが、深秘釈では、それは法身仏の一つであり、万徳の一つであるとする。

第六の他縁大乘住心は、すべての人々に対して無条件で平等な慈悲を及ぼそうとする「菩薩」の心である。それは大乘の共通特色であるが、この住心では唯識学派・法相宗が大乘の初門として説かれる。菩薩は、人法二空と三性（遍計所執性・依他起性・円成実性）の理を観じ、自執の汚染を除き、四量（慈・悲・喜・捨）を修し、四摂（布施・愛語・利行・同事）を行じて、他人のために働く。その唯識法相の修行の段階たる五位が説示される。一は資糧位で、菩薩の十地の前段階たる十住・十行・十廻向の三十心がこの段階である。二の加行位は、第十の廻向の最後で、修行の功を増加する位。三は無漏智を得て真理を体得する通達位。四は菩薩の十地で無分別智を修習する修習位。五は無上至極の悟りの段階たる究竟位である。この住心は、顕教で法相宗に該当するが、真言の深秘釈では、弥勒菩薩の大慈三昧であるという。第七の覺心不生住心とは、心主自在で、自心の本不生の理を覺り、一切の戲論を離れる住心である。空は即ち仮有の根本であり、仮有は有ではないが、空空として不住である。それ故に、色即是空・空即是色である。空性を無得に観じ、戲論を八不によって越える。權智と実智

とは、円覺を一如に証し、真俗二諦は、教理を絶中に得る。心性の不生を悟り、境智の不異を知る。この住心は三論の宗義に相当する。深秘釈では、文殊菩薩の「三摩地」(samadhi)の法門で、この菩薩は、大日如來の智慧を表したものであるとされる。

第八の一道無為住心は、また如実知自心、または空性無境心と名づけられる。智顗による、『摩訶止観』の重要な箇所にある、解脱に至る十乘觀法の内観不思議境・破法遍・無法愛などが説かれる。天台宗の思想たるこの住心は、深秘釈では觀自在菩薩の三摩地門を説いたものとされる。その真言を受持し誦誦すれば、速かに解脱を得て觀音菩薩と等同になるとする。若しこの真言の密義を得れば、一切の法教は皆悉く平等であるとする。第九の極無自性住心というのは、空性を覺り、因縁生無自性の理に達する心である。空海は、この典拠を華嚴思想に置く。華嚴宗は五教・十玄・六相・華嚴三昧が至要であるとして、五教を論じ、事事無礙法界の十玄門を述べ、六相を説き、実践証修の華嚴三昧を示す。深秘釈でこの住心は、普賢菩薩所証の三摩地門であり、またこれは大毗盧遮那如來の菩提心の一門であるとされる。

第十の秘密莊嚴心とは、身・口・意の三密によって、大日如來の世界である「曼荼羅」(mandala)を莊嚴する意味である。それは自心の源底を覺知し、如実に自身の數量を証悟することであるという。この覺知自心之源底は「成仏」で、如実証悟自身之數量は「即身」である。真言密教(Mantra-yāna-vāda)を学び、修行

して、即身成仏し、曼荼羅の諸尊になる心である。空海は、「如実知心」の一句は量り知れない意味を含んでいるとし、堅には十重の浅深を顕わし、横には塵数の広多を示すという。堅の構造は、「九頭一密」といわれ、第一の羝羊の暗心から、漸次、背暗向明、求上する。第九住心までが顕教で、第十住心が最高の密教の段階と、教相判釈の区別をする。横の構造は、「九頭十密」といわれ、第九住心までの道程も、深秘からすれば、すべて密教の顕われている状態で、第十住心に包摂されているとする。『秘蔵宝鑰』は九頭一密に、『十住心論』は九頭十密の立場に重点が置かれていると言える。

キリスト教哲学者で、フランシスコ派の神学者、ボナヴェントゥーラ (1221-74) の *Itinerarium mentis in Deum* は、靈魂が、神にまで上昇する道程を六段階に分けて叙述した著作である。以下において、その内容を考察して、概要を述べることにしよう。⁽³⁾

第一の段階は、神への上昇の諸段階と、万物における神の痕跡 (vestigium) による、神の観想 (speculatio) である。パウロに從って、被造物の秩序・美などを通して、神の痕跡を見出すことから始まる。最高善・至福は、我々より高い所にあるが、人間は自力で昇れないで、神の助力により昇って行く。神の助力は、謙遜で信仰深く、熱心に祈る人に与えられる。祈ることにより、神への道を学ぶための光が得られる。淨心により、被造物を通して神に至る道に入る。そのために、「心を尽し、精神を尽し、思いを

尽して」神を愛せよという。神により創造された、「神の似姿」 (imago Dei) たる人間は、その根源の神へと上昇する。聖フランシスコに現れたとされるセラフイム (Seraphim 熾天使) が持つ三対の翼は、人間の靈魂が神へと上昇して行く六段階を象徴すると、ボナヴェントゥーラは考えた。神にまで昇る六段階に並行して、靈魂の能力もまた、低所から高所へ、外から内へ、一時的なものから永遠なものへと、六段階を持っていて、六段階に理性の能力としては、次の六つが各々対応するという。即ち、感覺 (sensus) ・表象 (imaginatio) ・理性 (ratio) ・知性 (intellectus) ・叡智 (intelligentia) ・靈魂の尖端 (apex mentis) である。これらの人間に本来、植え付けられた能力は、罪により歪められて、それは恩寵によらなければ救済されない。救済されるのには、靈魂を淨め、祈り、聖なる生活を送って、真理を省察して、次第に神を見るシオンの丘に近づくようにすべきであるという。原罪によって汚された靈魂を淨めるには、自我と被造物への執着から離れるべきであるとする。世界における各事物は、重さ (pondus) ・数 (numerus) ・尺度 (mensura) により造られて、相互に作用し合い、変化して行く一切の事物に秩序と規則がある。このことから人間は、神の無限の能力と智慧と善性を理解できるであろうという。

第二の段階は、感覺的世界での、神の痕跡における神の観想である。第一の段階のように、被造物を通して神の能力と智慧と愛

の反映を見るだけでなく、被造物において神の能力と智慧と愛の働きを見るのである。この第一・第二段階を、セラフィムの二枚の下向きの翼に譬える。即ち、この翼で、人間の靈魂は、下にある被造物から神へと上昇し、被造物を通して、また被造物の内に神の無限の能力と智慧と愛を認知できるようになる。このように被造物によって、或程度までは神の本質と徳を見ることができ。こうして、人間の靈魂は、神が一切の被造物の原因 (origo) で典型 (exemplar) で、目的 (finis) であると知ることができるといふ。そしてまた、ボナヴェントウラにおいては、神の能力において聖父を、神の永遠の智慧において聖子キリストを、神の無限の愛において聖靈のペルソーナを考える。そして一切の被造物は、三位一体神の反映・似姿であるとする。

第三段階は、自然的諸能力に印づけられた神の似姿による神の観想である。この段階では、自己反省し、靈魂の自然的諸能力を観想する。そしてそれらの根底にある神を観想するのであり、それは人間の靈魂が、神の似姿であることに基づくというのである。人間の靈魂の諸能力は、記憶 (memoria)・叡智 (intelligentia)・意志 (voluntas) の三つで、これらは相依相関している能力である。人間は靈魂を浄めれば、自己の靈魂の能力においても三一神の似姿を見ることができて、神との合一への道を上昇する。この段階で、彼はアウグスティヌス哲学に基づいて、自己の内なる靈魂に入り、記憶・叡智・意志の三能力によって神を知るのである。

第四の段階は、恩寵の賜物によって改造された神の似姿における神の観想である。原罪のために罪深い人間は、靈魂の浄めが必要であるが、それは自力では果せない。「私は門である」(Ego sum ostium) という、キリストを通して入る者は救われる。恩寵の賜物として、三一神が、人間の靈魂の内に住むようになる。その最も重要な方法が、信仰と希望と愛 (fides, spes et caritas) の三つの神学的徳を發達させることにより、靈魂が浄化 (purificatio) され、照明 (illuminatio) され、完成 (perfectio) されるという。原罪により喪失した精神的感覚が、キリストに対する信仰と、キリストによって与えられる恩寵によって回復する。この精神的感覚は、肉体的感覚に似ていて、これによって神秘的 방법으로、神について眼・耳・鼻・舌・身で体験する。靈魂が、完全な神の似姿となる時、靈魂は靈魂の内に神を見る。靈魂は、信仰・希望・愛によって正しくなる時、神と合一して真理を所有する道へと向う。要するに、この段階は、与えられた超自然的能力と精神的感覚によって、自己の靈魂内に映された神の姿を見るのである。そこでセラフィムの中間の二つの翼に譬えて、それを開いて神に昇るというのである。これは神によって注がれた神学的徳と、浄化・照明・完成又は合一の働くと、聖書の教示の作用に因る。このような経験は、二つの掟、即ち神と隣人への愛を更に完全に履行させる効果があると説く。

第五の段階は、神の第一の名たる「存在」(esse) によって、神

の唯一性を観想することである。第三段階までは、自然的知性により神の似姿を見て、第四段階においては、キリストに対する信仰と、キリストにより与えられる恩寵によって、神の似姿を観想した。しかし、これらは神との合一に至る道における助けにはなるが、合一の直接の方法ではない。第五段階で、ボナヴェントゥーラは、神の本質を考える。神の本質を適切に表現するのは、具体的概念でなく、最も抽象的な概念である。一切の具体性を取り去れば、結局、存在自体が残る。アリストテレス的に存在自体の中に神を観想する。そして存在としての神を、『旧約聖書』の神に結びつける。神は無限・絶対で完全な存在である。存在自体である神は、最初で最後、永遠で現在、単純で最大、至高の唯一でありながら、すべてを含む。その中心はどこにも存在し、その周辺はどこにもない。力と智慧を持つ存在で、一切の有限存在の原因で目的である。神は、要するに時間・空間を超越した永遠不変の存在自体であり、それは、『旧約聖書』(出エジプト記、三ノ十四)の *Ego sum qui sum* という神であると説く。

第六段階は、神の名たる「善」(*bonum*)における三位一体の観想である。プラトンの、プロティノスの存在の彼方に善なるものとしての神を観想する。そして、アンセルムスの、それ以上善なるものは考えられない最高善、これが愛であり、三一神であることを覚る。最高善を本質とする神は、その自己の内から無限の智慧によって、聖子を生んだ。聖父と聖子は、無限の愛によ

って、聖霊を發出する。墮罪した人間は、聖子キリストによってだけ救われて、再び神とその三位一体の生命との合一の状態が得られるのである。

以上のような六段階を経て、霊的、神秘的な「脱我」(*excessus*)によって、完全に神の内に入る感動で知性に「平安」(*requies*)が与えられる。信仰・希望・愛の黙想によってだけ入口を通過できる。神との神秘的合一は、キリストにより与えられる聖霊によってだけできる体験であり、人間知性を超えている。人間知性を超えた *mysterium* に入り、ディオニシオス・アレオパギタ的に、靈魂の脱我により、神の内に憩うのである。人間の靈魂が神に変化するのではない。心の浄化、善徳の実行、キリストを通して、神との合一を意識し体験するのである。

以上において、空海の代表的著作の『十住心論』と、ボナヴェントゥーラの著作の一点たる『Itinerarium』の所説の概要を辿ってみた。他著作をも念頭において、両者の比較考察を試みよう。但し、紙幅の都合で概略を述べるに止める。空海思想から少考すると、ボナヴェントゥーラの思想は、十住心の第三嬰童無畏住心の段階に該当するようにも思われる。しかしながら、第六他縁大乘住心における三十心の中の、例えば、治地住・歡喜行・饒益行・無違逆行・隨順堅固一切善根廻向などを詳細に対比検討すると、両思想の類似性が認められる。究極の段階に到達すると、前者は、『十住心論』の序文に、「入我我入の莊嚴の徳を顯証せしめ

ん」とあるように、〈人我我入〉即ち、仏我に入り、我仏に入ると、仏と我とが加持感應して一体となることを目指す。加持感應において、自我の否定の無我が大我、即ち真実の自我として甦る。法身は、自己の各住心を超越すると同時に、各住心に顕現して内在する。大日如来は理法身として、心の内に潜在するのであり、執着を棄てた自性清浄心の外に存在するのではない。法身の実在を感得して、〈即身成仏〉するのである。後者において、神は唯一絶対の超越者として、被造物と厳密に区別されているにも拘らず、神の最高の無限性と能力の故に、微かな反映としてはあるが、神は万物に内在し、人間自身の内奥に現存する。靈魂が、一切の被造物に対する執着を棄てて心身浄化されると、キリストが靈魂の内に生きて自由に働くので、三一神の生命に与えることを知る。靈魂は、万物を無から創造した神の被造物であるということが、空海とは異質のボナヴェントゥーラの思想の大前提としての信仰である。両者は共に夫々の道に則って究極の真理を把握している。後者について、ジルソンも、「ボナヴェントゥーラの学説は、我々から見れば、思弁的神秘神学の最高頂を示しており、今まで成就しなかった完璧な総合を構成している⁽⁴⁾」と言う。両思想は、その前提が違うので、思想形態の特質に差異が見られ、畢竟は根本真理をも異にしている。

- (1) 弘法大師全集（密教文化研究所）第一輯（巻第二）一二九頁
(2) 同書、一三〇—四一四頁

(3) S. Bonaventurae Opera Omnia, edita studio et cura P. Collegii a S. Bonaventura, Firenze-Quaracchi, Tom. V, 1891, pp. 295—316. この著作を含む、彼の著作は殆ど日本語に訳されていない。一九八三年に、「東京ボナヴェントゥーラ研究所」ができたので、何れ翻訳されるであろう。この小論は、ラテン語原典に拠るが、次の近代語訳を参照している。

Saint Bonaventure's Itinerarium Mentis in Deum. With an Introduction, Translation and Commentary, P. Boehner. The Franciscan Institute, 1956.

Pilgerbuch der Seele zu Gott, eingeleitet, übersetzt und erläutert von J. Kaup. Kösel-Verlag, München, 1961.

Itinéraire de l'esprit vers Dieu. Introduction, traduction et notes par H. Duméry. Vrin, 4^eéd., 1981.

(4) Étienne Gilson, La Philosophie de Saint Bonaventure, Vrin, 3^eéd., 1953, p. 396.

（かみら・ただし、比較哲学、群馬大学教授）